

フルトヴェングラー・センター® *The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan*

創設 2003 年 10 月 1 日 Established: 1 October 2003

名誉会長 Prof. Dr. アンドレアス・フルトヴェングラー

Honorary President: Prof. Dr. Andreas Furtwängler

会報第 73 号 2025 年 11 月 / Newsletter No. 73, November 2025

フルトヴェングラー・センター会員の皆様、

「四季」から「二季」への流れは止まることを知らず、首都圏では、つい先日 30 度を超える猛暑だったのに、それが短い秋を通り過ぎて、早くも冬支度になりつつあります。インフルエンザも大流行の兆しを見せつつありますので、会員の皆様には温度変化に留意の上ご自愛くださいませう。

諸般の事情から発行が遅れて申し訳ございませんでしたが、会報 73 号は次のような内容でお届けします：

目次

- | | |
|--|------------|
| 1. 追悼 桧山浩介 相談役 | P. 1 - 4 |
| 2. 完全ディスコグラフィー 2024 年版頒布のご案内 | P. 5 - 6 |
| 3. 新譜 CD 頒布のご案内 | P. 6 - 9 |
| 4. 桧山コレクション ハイレゾ音源頒布のご案内 | P. 9 - 10 |
| 5. WFFC1503-HYM_HiRes の制作にあたって | P. 10 - 11 |
| 6. 第 103 回、第 104 回レクチャー・コンサートのご報告と頒布資料について | P. 11 - 19 |
| 7. センター既発盤へのご感想 | |
| ディートリッヒ・フォン・カルテンボルン氏 | P. 19 - 22 |
| ヘニング・スミット（オルセン）氏 | P. 22 - 24 |
| マーク・メドウィン氏 | P. 24 - 25 |
| 8. フランス・フルトヴェングラー協会の『新譜』について | P. 25 |
| 9. 第 105 回レクチャー・コンサートのご案内 | P. 26 |
| 10. 会員更新延期のご案内 | P. 26 |

追悼 桧山浩介（本名 山口勲）氏

フルトヴェングラー・センター 相談役（元 顧問）



2025年8月5日 誤嚥性肺炎で病没されましたので、謹んでご報告申し上げます。

桧山氏は「クリティカル・ディスコグラフィ」をはじめ多くのフルトヴェングラー関連の研究やラジオ放送等で著名で、センターでも前後15回に及ぶレクチャー・コンサートを講演されました。

なかでも2004年に5回に渡って行われた「フルトヴェングラー没後50周年記念連続セミナー」は氏の気迫に圧倒される名レクチャーで、古い会員の方々の記憶に残っていることと思います。

2007年には、それまで収集されてきたフルトヴェングラー関連の全SPを、その後更に全LPをセンターに寄贈され、これがその後のCDシリーズ「桧山コレクション」に繋がり、現在もハイレゾ・デジタルファイルの頒布が進行中です。

桧山氏はセンター頒布の多くのCDで解説を書いてくださいました。今回はこの中からWFHC-015（2008年3月頒布 1954年ルツェルンの「第9」）に寄せて書かれた解説「白鳥の歌」をオリジナル・フォント（MS明朝）のまま再録いたします。

桧山浩介氏のご冥福を祈り、生前のご厚誼に改めて感謝申し上げます。

合掌
フルトヴェングラー・センター
理事・会長 中村政行

カルラ・ヘッカーがその著書『フルトヴェングラーとの対話』の末尾、“ザルツブルクでのエピローグ”のなかで、女史が最後の年のザルツブルクでの「ドン・ジョヴァンニ」を聴いたあとに、この演奏が聴いた者の胸のうちに潜む魔性的な何かを燃え上がらせたのはこの上演を地上の舞台でのフルトヴェングラーによって指揮される最後のものと予感したのだったからだろうか、と述懐しているが、このことは「ルツェルンの第九」にも当てはまるような気がする。

フルトヴェングラーが初めてベートーヴェンの「第九」を振ったのは彼が27歳のリユーベック時代、1913年4月26日のことだ。さらに生涯最後の「第九」となったのが「ルツェルンの第九」、1954年8月22日、その死の三ヶ月前だ。トレマンの『コンサート記録』によればこれらの日を含めてフルトヴェングラーの生涯での「第九」の演奏総回数は107回にも達する。107回が多かったのかそうでないのかは当然議論があろうが、フルトヴェングラーにとってのベートーヴェン、ベートーヴェンにとっての「第九」、という関わりでこの数字を見るならば、その一回々の持つ“重み”はおのずから明らかだろう。

ところでフルトヴェングラーの生涯を通じての「第九」演奏記録をつぶさに見てみると先に述べた“重み”に関わる興味深い事実気付く。それは107回の全演奏回数のうち1945年以前が67回、戦後つまり1947年から死去する迄の8年間に40回という圧倒的な戦後の比重がまず第一。さらには67回という1945年以前の中で1942年のみが一年で9回という異常な多さを示し、それ以外の年は年間2乃至3回であること。ひるがえって戦後は5回（1948年）、9回（1949年）、3回（1950年）、9回（1951年）、4回（1952年）、7回（1953年）、3回（1954年）といずれも1945年以前を大幅に上回っている事、などである。これらの事実はフルトヴェングラーにとっての「第九」の“重み”とともに、その持つ“意味”についての考察を我々に求めている事は間違いない。

ご承知のようにフルトヴェングラーには「第九」についてのまとまった論考はない。しかし晩年には「第九」についての見解をまとめるつもりであった事はその『手記』の1954年の項の冒頭に“論文—第九交響曲”とのメモ書きがあることでも伺えるし、ルツェルンでの当日にも「第九」について語った録音テープも短いものではあるが残されている。しかしこれらを除いても、残されている他の巨匠の多くの論考からその「第九」論を紡ぎだしてみることは不可能な事ではない。その中心になる論考が1938年に執筆された『音と言葉』だと思う。

『音と言葉』でフルトヴェングラーが主張する中心点は音楽史上での文字通り「音」と「言葉」の関係の変遷とそこに果たす調性の役割だ。とくに強調する点は調性こそ音楽にとって普遍性を持つ非歴史的な要素で、音楽の芸術たる所以はじつにこの調性に負っているとする点だ。調性の歴史性をめぐる議論は19世紀末から20世紀にかけての調性の崩壊と無調へと続く近現代の音楽の評価に直接結びつく音楽史上の大問題であるのはよく知られている事だ。ここではその点の議論は避けるが、フルトヴェングラーは「音」と「言葉」や作曲・演奏・聴衆（創造・再創造・鑑賞）など音楽にかかわる諸要素の間において相互を結びつけるものとして「愛」とよぶ概念を置く。そして「愛」により結び付けられる諸

要素の全体を「愛の共同体」とよび、それを調性が土台として支えている、との確信を披瀝し、調性の擁護を音楽家としての自らの使命として位置づけている。その事は「愛」の破壊をもたらす社会的な変化に対して、いっそうの強いメッセージとしての「愛」に依り立ち向かうという姿勢を鮮明にする。先にあげた1942年と戦後にみせる「第九」への異常なまでのこだわりもこのように考えると理解できると思うのだが、これは穿ち過ぎた見方だろうか。たとえば『手記』の1943年の項に記されているメモ書き、“しかしベートーヴェンが彼の作品、とりわけ第九交響曲で人類に向けた告知、すなわち善意、信頼、神の前での融和の告知が、まさに今日ほど必要とされた時はいまだかつて存在しなかったように思われる”はまさにこの事を示しているものと考ええる。

「第九」の有名なメロディはベートーヴェンがすでに1794年に作曲している歌曲「相愛」(Wo O 118)にその原型がはやくも登場している。さらにこの「相愛」のメロディもフランス革命時に活躍した啓蒙思想家でもあるフランスの作曲家メユールの或る作品に酷似していることが知られている。ボン時代にフランス革命の高揚した雰囲気を受け取り、それを最高の作品に結晶させたのが「第九」だといえる。それは“抱き合え、千万の人々よ”と「愛の共同体」を高らかに謳歌する全人類への呼びかけなのだ。

フルトヴェングラーのコンサート記録を見ているとルツェルンという街はフルトヴェングラーにとって特別の思いがこもった所であったような気がする。巨匠がはじめてこの音楽祭に招かれるのは1944年8月22日で、奇しくも「ルツェルンの第九」のちょうど10年前の事だ。第二次世界大戦の終結をはさんで、戦後は1947年から1954年まで毎年参加することを恒例としていた。但し1952年は病気のためキャンセルせざるを得なくなったが。さらに興味深い事はルツェルン音楽祭では他では取り上げなかった曲も含めて声楽を伴う大曲を多く演奏していることだ。「ドイツ・レクイエム」(1947年)、「第九」(1948年、1954年)、「天地創造」(1949年)、「ファウストの劫罰」(1950年)などで、とくに「天地創造」と「ファウストの劫罰」はここ以外では演奏されたことはない。おそらくこれは大戦終結を挟む巨匠のもっとも困難な数年間に暖かい手を差し伸べた、さらには晩年の住処と定めた、スイスへの心からの敬愛の印だったのかもしれない。

ところでフルトヴェングラーの最後の出演となった1954年の音楽祭は、従来の音楽祭管弦楽団に代わってフィルハーモニア管弦楽団が登場し、8月8日を皮切りに8月28日まで合計9回の演奏会が行われている。驚くべきはその豪華な顔ぶれだ。指揮者は8日と12日の最初の二回がカラヤン、つづいてクーベリック、フリッチャイ、フルトヴェングラー、クリュイタンス、それにエドヴィン・フィッシャーの弾き振り！ ソリストもギーゼキング(モーツァルト)、デ・ヴィトー(ブラームス)、ハスキル(チャイコフスキー)、フィッシャー(モーツァルト)、イーゴリ・オイストラフ(ハチャトゥリアン)！！きら星の如くとはまさにこのような事を云うのだろう。さらに特筆すべきはこの頃のフィルハーモニア管弦楽団のレベルの高さだ。「第九」の第二、第三楽章でのホルンのデニス・ブレンをはじめとして、とりわけ管楽器奏者の力量の高さには驚嘆のほかない。ティンパニー奏者の至芸も見事の一語に尽きる。

フルトヴェングラーはご承知のように21日、22日の「第九」、25日のハイドン「88番」、ブルックナー「第七」の三ステージを指揮し、このうち22日のみ放送され、そのテープは現在ローザンヌ放送局に保存されている。この「第九」の録音についてはかつては粗悪な音質でしか聴く事が出来な

かったために正当な評価を受けていなかったが、近年はT A H R A盤をはじめとした高音質盤の登場でようやくこの演奏の真価に触れることが出来るようになった。清水編『フルトヴェングラー完全ディスクグラフィ』（2007年版）には11種類の「第九」（全曲）と部分的な2種類の計13種類の公刊が記載されている。それらを列挙すれば次の如くである：

- 1937. 5. 1 (全曲) ベルリン・フィル (ロンドン)
- 1942. 3. 22～24 (全曲) ベルリン・フィル (ベルリン)
- 1942. 4. 19 (全曲) ベルリン・フィル (ベルリン)
- 1942. 4. 21～24 (第3楽章より, アセテート盤4面) ウィーン・フィル (ウィーン)
- 1943. 12. 8 (全曲) スtockホルム・フィル (ストックホルム)
- 1951. 1. 6～10 (全曲) ウィーン・フィル (ウィーン)
- 1951. 7. 29 (全曲) バイロイト祝祭管弦楽団 (バイロイト)
- 1951. 8. 31 (全曲) ウィーン・フィル (ザルツブルク)
- 1952. 2. 3 (全曲) ウィーン・フィル (ウィーン)
- 1953. 5. 31 (全曲) ウィーン・フィル (ウィーン)
- 1954. 8. 8 (リハーサル部分) バイロイト祝祭管弦楽団 (バイロイト)
- 1954. 8. 9 (全曲) バイロイト祝祭管弦楽団 (バイロイト)
- 1954. 8. 22 (全曲) フィルハーモニア (ルツェルン)

それに昨年センターにより初公刊されたバイエルン放送収録の「バイロイトの第九」を含め、目下14種類のフルトヴェングラーの「第九」を聴く事ができる。これらの全てに耳を通して私には「ルツェルンの第九」こそもっとも冷静にフルトヴェングラーの「第九」に向き合える、との印象が強い。たしかに1942年の二つのベルリン盤、1951年の二つのバイロイト盤、これらはいずれも聴く者にきわめてインパクトの強い強烈な印象を与えるが、同時にその背後にある特異な状況がフルトヴェングラーのこの曲に求める本来の理念を見え難くしているように思えてならない。置かれた状況の特異さ故に、先にも触れたようなフルトヴェングラーのいう「愛」が、その貫徹へ向けての使命感が増幅されすぎているように私には思えるのだ。もちろんこの事は「第九」がそのような過度の増幅をも受け止める事の出来る稀有の曲である事をも意味する。しかしフルトヴェングラーがいう「愛」は当然のこととして普遍的な概念であるはずで、スタジオ録音盤の「英雄」、「運命」、「グレート」、シューマン「第四」などのもたらす感銘の深さは冷静な状況下での「愛」の昇華が如何ほどのものであるかを見事に示した例だろう。

ルツェルン音楽祭のステージに立った時、フルトヴェングラーが自らの残された時間がすでに尽きかけているのを知っていたのかどうかは定かではない。しかしこの両三年、体調の、とりわけ聴力の衰えは深刻だった。ルツェルンの翌月、1954年9月20日のベルリンでの演奏会のあとで、「もうベルリンで演奏することはないだろう」と周囲に漏らしたと伝えられている。おそらくルツェルンでの演奏の折には、その脳裏を“これが最後の「第九」”との感慨が横切っていたのではないかと想像する。だからこそフルトヴェングラーが求めたであろう「第九」の本来の理念を私はこの「ルツェルンの第九」の中にもっとも強く感じるのだ。とくに第三楽章からは「バイロイトの第九」に感じる「彼岸性」よりももっと暖かな「此岸性」を感じる。まさにフルトヴェングラーの“白鳥の歌”とするに相応しい。くわえて先にも触れたように「第九」自体、作曲者が文字通り「愛」を主題に作った曲であり、曲と演奏が相まったフルトヴェングラーの「第九」こそ人類にとって最大の価値ある創造行為の結晶であると考ええる。

清水 宏 編著 / フルトヴェングラー・センター編集・加筆

フルトヴェングラー 没後70周年記念

完全ディスコグラフィー 2024年版

(2024年11月30日発行 A4版 142ページ 2700円)

フルトヴェングラー
完全ディスコグラフィー

WILHELM FURTWÄNGLER
COMPLETE DISCOGRAPHY



2024年版

フルトヴェングラー・センター
The Wilhelm Furtwängler Centre of Japan

待望久しい「清水本」完全ディスコグラフィー2024年版が完成しました。本書は2024年11月までに全世界で発売・発行されたレコード、テープ、CDなどを分かる限り全て記載してあります。編者の方針でデジタル・データのみでの配信は含まれておりません。

フルトヴェングラーのディスコグラフィーといえば、

- オルセン第1版 (Nationaldiskoteket, Copenhagen 発行)、
 - オルセン第2版 (Lee Schipper and North American Wilhelm Furtwaengler Society 発行)、
 - オルセン第2.1版 (フルトヴェングラー・センター復刻・発行)、
 - René Trémine 編 “Wilhelm Furtwängler a Discography” (Productions Tahra 発行)
- 及び本書 清水宏編「完全ディスコグラフィー」

が知られていますが、既発売レコード・CDなどのカタログ番号を網羅した資料はこの「清水本」しかなく、海外のコレクターなどにも(すべて日本語で書かれているハンデがあるにもかかわらず)珍重されているものです。

2014年版発行から10年、改訂版はいつ出るのか、と多くのお問い合わせを頂いておりました。編著者の清水氏もすでに85歳を超えてなおフルトヴェングラーに寄せる情熱やみがたく、フルトヴェングラー没後70周年の2024年11月30日発行で2024年版の完成に至りました。多くの会員の方々に座右の書としてご購入頂けますようお願いいたします。

なお、お申し込みはお一人3部まで、また先着30名様にはセンター復刻のオルセン・ディスコグラフィ第1版（通常価格2500円）をプレゼントいたします。なお当選は発送をもって代えさせていただきます。（ご不要の方はその旨ご連絡ください）

頒布価格： 2,700円

- 電子版の同時発行 書籍版をお求めいただいた方限定で、ご希望があれば、PDF版を有料頒布いたします。内容は書籍版と同様ですが、配信後タブレットやスマホなどに収容することで、お出かけ先でも容易に参照することが可能となります。

頒布価格： 1,000円

申込要領：

1. 本ディスコグラフィはフルトヴェングラー・センター会員であればどなたでも申し込めます。
2. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
3. 申し込み期限は2025年12月19日（金）です。締切後も在庫がある限りはお申込戴けますが、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
4. この資料はセンター会員自身が所有される事を条件に3冊までご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

発送：

発送に関するお問い合わせは2026年1月下旬以降にお願い致します。お問い合わせの際は①振込年月日、②振込金額をお知らせ下さい。

#####

新譜 CD 頒布のご案内

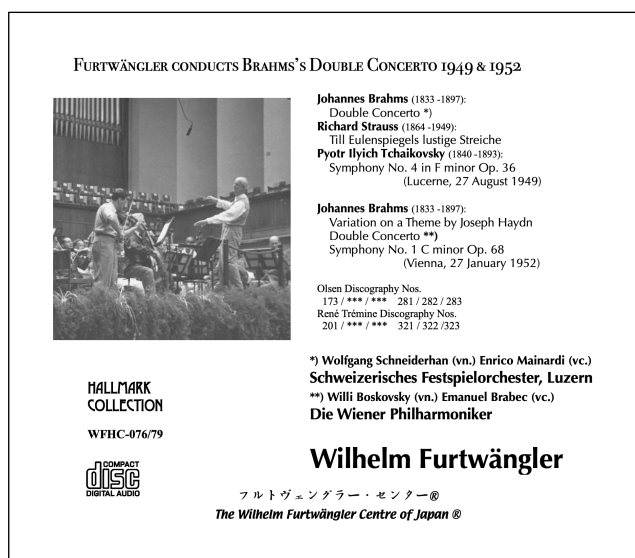
センター会報第60号で「オルセン・ディスコグラフィ」の編纂者として、また世界でも有数のフルトヴェングラー研究家、（旧）デンマーク・フルトヴェングラー協会の創設者・会長として著名な Henning Smidth（ヘニング・スミット 通称オルセン）氏から、氏のオープンリール・テープコレクションをすべて寄贈いただいたことのお知らせしました。氏にはセンターの草創から Adviser としてセンターの活動を支えて頂いてきていますが、これらの貴重な資料をこれまで以上に十分に整備したテープデッキを使用して収録内容のすべてを引き出すデジタル化をおこない、高品質の CD-R 及びハイレゾ音源として会員の皆様に提供しています。なお、スミット氏のテープには、残念ながら音質のあまり芳

しくないものもあり、またフルトヴェングラーの全録音をカバーしきれていない部分もありますので、場合によって、既出の SP 盤、LP 盤やセンター自身が保有するテープ・アーカイブからの復刻も併せて行っております。今回はこの中から次の 1 組をお届けします。

ブラームス：ヴァイオリンとチェロの為の二重協奏曲 1949 年&1952 年

1949 年 8 月 24 日 ルツェルン音楽祭でのスイス祝祭管弦楽団演奏

1952 年 1 月 27 日 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団定期演奏会



フルトヴェングラーが指揮活動を本格化した 1911/12 年のリューベック時代から、最後の 1945/46 年のシーズンまでの 44 シーズンの内、45/46 年の活動停止時期と実際の演奏会を 2 回しか指揮しなかった 54/55 年シーズンを除く 42 シーズンの全てでブラームスの作品を指揮しました。

ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲は、第二次大戦前・戦中に 21 回、戦後は 8 回演奏されました。戦後初めてこの曲が採り上げられたのは 1947 年 9 月 22 日ハンブルクで NWDR オー

ケストラを指揮した演奏会（ヴァイオリン：エーリヒ・レーン、チェロ：アルトゥール・トレスター）でしたが、録音は残されていません。戦後 2 回目が 1949 年ルツェルン音楽祭での演奏（ヴァイオリン：ヴォルフガング・シュナイダーハン、チェロ：エンリコ・マイナルディ）で、これが今回の新譜に収録された演奏です。

この録音はかつてヘニング・スミット（オルセン）氏から提供された音源を元として、2003 年、センター初回新譜の一環 WFHC-003 として頒布されましたが、現在は完売・廃盤となっています。その間に氏のテープ・コレクションがセンターに寄贈されましたので、改めてそのテープを、ゲインの調整およびピッチ修正した最良の状態再生・デジタル化して再度ご提供することとしました。テープ再生・デジタル化は津野宏理事が担当しました。

この日の演奏会では二重協奏曲が最初に演奏され、2 曲目がリヒャルト・シュトラウスの「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」、後半がチャイコフスキーの交響曲第 4 番という構成でした。この二重協奏曲については、テープ録音とは別に、アセテート盤も残されています。スミット氏のテープ及び既出盤のすべてには、第 1 楽章の後半にテープのよじれたような音になる部分がありますが、アセテート盤にはそれがありませんので、今回の復刻ではアセテート版のノイズを大幅に処理した上で、スミット氏のテープとアセテート盤復刻版の両方を収録することといたしました。なおアセテート盤には、演奏前のラジオ放送のアナウンス、演奏

開始前のオーケストラのチューニングや楽章間の会場での聴衆ノイズ、終演後の拍手など、元通りの長さですべてが収められておりますので、ノイズの多さを割り引いても非常に興味深い音源と思われます。この形では世界初出です。

2 曲目の「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」も同様のアセテートで残されていますが、この曲の戦後最初の録音で、これまで発売されたことのない世界初出音源です。これもノイズを処理した上で収録します。

3 曲目のチャイコフスキーの交響曲第 4 番はドイツ協会および当センターとの共同制作の CD WF-GFJ124 としてフランス・フルトヴェングラー協会から頒布されておりましたが、現在は廃盤となっています。これもフランス協会の許可を得て、再録することとし、同日の演奏曲目全てが初めて CD 化されることとなります。

後半の CD2 枚には、1952 年 1 月 27 日ウィーンでの 1951/1952 シーズン第 5 回定期演奏会「オール・ブラームス・プログラム」の全曲を収録します。1 曲目は「ハイドンの主題による変奏曲」、2 曲目が「ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲」で、ソロ演奏は、ヴァイオリンが当時ウィーン・フィルの首席奏者であるヴィリー・ボスコフスキー及びエマヌエル・ブラベッツが担当し、ウィーン・フィルと間然無き名演となっています。後半はブラームスの交響曲第 1 番です。

なお 1 - 2 曲目はスミット氏のテープがありますが、交響曲第 1 番は既出の LP 盤を復刻します。

WFHC-076/79

フルトヴェングラー指揮 ブラームスの《ヴァイオリンとチェロの為の二重協奏曲》 1949 年&1952 年

頒布資料代：CD-R 4 枚組 **WFHC-076/79** 頒布価格 **8,000 円**（国内送料込み）

ご購入いただいた方限定で、192Hz/24bit ハイレゾ・デジタル音源も配信します：

192kHz/24bit デジタル音源 (wav) 追加価格 2,000 円

1. CDR 製作用原盤の製作にあたっては、「桧山コレクション」で使用してきている Plextor 社製作の CDR 焼成機の銘機「PlexMaster」により、パソコンなどの CDR 焼き込みでは到達できない純度の高い CDR 原盤を作成しています。
2. 頒布用 CDR 製作については、「桧山コレクション」でも使用したプロ仕様のハイスペック CDR を使用し、更に原盤を忠実にコピーする「1:1 オンザフライ」プロセスにより、原盤の音を完全に再現することといたしました。

資料申込要領：

1. 同封の郵便振込票をご利用ください。

2. 申し込み期限は **2025 年 12 月 19 日 (金)** です。これ以降もお申し込みはお受けしますが、原則として受注生産を行いますので、できるだけ期限までにお申込をお願い致します。
3. このCD-Rはセンター会員自身が所有される事を条件に3セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

発送予定：2026年2月

お問い合わせの際は ①振込年月日、 ②振込金額をお知らせ下さい

#####

楡山コレクション 第3集～第23集のハイレゾ音源配布について

センター元相談役・山口勗氏（ペンネーム 楡山浩介）から愛蔵のフルトヴェングラーの78回
 転盤レコード（以下 SP）コレクション約170枚を寄贈いただいたことは会報第16号（2007
 年12月発行。曲目明細掲載）でご紹介いたしました。その後さらに544枚におよぶLPコレク
 ションも寄贈いただきましたが、これらのSPやLPはまだインターネットや電子メールが普及
 していない時代に海外と手紙などをやり取りしながら永年に亘り蒐集された極めて貴重なもの
 で、SPに関してはフルトヴェングラーの録音全82点^{*}のうち11点を除く71点を網羅してい
 ます。（^{*}オルセン第2版の分類番号による点数）

2014年以來、それらの中からSPをセンター会員諸兄のフルトヴェングラー研究に供するた
 めの資料としてCD化・ご提供することとし、2021年6月の第23集までシリーズ化しまし
 たが、これらもハイレゾ・ファイルで聴きたい、とする会員のご希望に応える観点から、「**楡山
 コレクション ハイレゾ音源シリーズ**」と題して、全録音をハイレゾ・ファイルとして頒布す
 ることといたしました。頒布はこれまで通り gigafile 便を使用する予定です。配信用のカバ
 ー・スリーブなどは印刷物としてはありませんが、代わりに CD 制作時に使用した印刷用原稿
 を一部手直しの上 PDF 化して簡易的に添付いたします。今回は以下の1点を頒布いたします：

●楡山コレクション 第7集

- ① モーツァルト作曲 交響曲第40番ト短調 K.550 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
 1948.12.7/8 1949.2.15（第2楽章）（ウィーン楽友協会大ホール）
- ② モーツァルト作曲 セレナーデ第10番変イ長調 K.361 「グラン・パルティータ」
 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
 1947.11.10/19/26（ウィーン楽友協会大ホール）
 1947.12.3（ウィーン楽友協会ブラームス・ザール）

指揮：ヴィルヘルム・フルトヴェングラー

WFFC1503-HYM-HiRes 頒布価格 2,000 円

資料申込要領：

1. 同封の郵便振込票をご利用ください。

2. 申し込み期限は **2025 年 12 月 19 日 (金)** です。これ以降もお申し込みはお受けしますが、原則として受注配信対応を行いますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。

3. ハイレゾ・ファイルはセンター会員自身が所有される事を条件に配布しておりますので、オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。

配信予定：2025 年 12 月

お問い合わせの際は ①振込年月日、 ②振込金額をお知らせ下さい

#####

WFFC1503-HYM-HiRes 版の制作にあたって

センター テクニカル・アドバイザー 清水公典

WFFC1503-HYM_HiResの制作にあたっては、さらなる音質等の向上を図って、以下のような改善を施した。WFFC1503-HYM は巨匠の数少ないモーツァルト管弦楽作品の録音であり「交響曲第 40 番」は早めのテンポの中に冴えた高弦と分厚く響く低弦の迫力、そして管楽セレナーデ「グラン・パルティータ」はウィーン・フィルの名手たちの柔らかなハーモニーが聴きものである。

1) 交響曲第 40 番

CDR リリースでは英 HMV の SP DB9441-3 から収録していた。今回新たに原盤としたのはより盤質が良く表面ノイズの少ない独 Electrola の同番号の SP でマトリックス番号は英盤と同一。再生には定評のある米 GE 製のカートリッジ RPX047 を使用した。この独盤では英盤とは少し異なる落ち着いた音色が堪能できる。第一楽章の面変わり部分、2VH7110-2 > 2VH7111-2 では CDR リリース同様 楽音をスプライスしないバージョンとスプライスしたバージョンの両方を収録したので SP 収録時にはマスクされずに響いていたファゴットの音型をお楽しみいただける。



独 Electrola DB6997

英 HMV D.B. 9441



英 HMV D.B. 9226

仏 VSM FALP117 (LP Symphony No.40)

2) グラン・パルティータ

こちらセンターのアーカイブの中からよりノイズの少ない盤を再度選定して全 10 面の再収録、整音を実施した (DB9226-30、マトリックス番号は CDR リリースと同一)。カートリッジは同じく米 GE の RPX053A を使用。

センターの CDR リリースや本家 EMI の LP、CD と最も異なるのは楽章ごとのトラック区分を一律に行っていないところ。すなわち同一 SP 面上での楽章の進行をそのまま収録し切り替わり部分にトラックを入れていない。これはフルトヴェングラーと演奏者が収録時に置いた楽章間の長さを取ってそのまま残すこととしたからである。

全曲の構成は次の通り。

- 第一楽章 2VH7062-1 全部 + 2VH7063-1 の前半約 2 分 14 秒
- 第二楽章 2VH7063-1 の後半約 1 分 14 秒 + 2VH7064-1 全部
- 第三楽章 2VH7104-1 全部 + 2VH7051-3 全部
- 第四楽章 2VH7090-1 の内約 3 分 18 秒
- 第五楽章 2VH7090-1 の内約 1 分 27 秒 + 2VH7103-1 全部
- 第六楽章 2VH7071-1 全部 + 7072-1 全部
- 第七楽章 2VH7089-2 全部

なお、この録音は 1947 年 11 月～12 月にかけて断片的に行われ、各収録日におけるピッチの相違が従来から指摘されていた。今回の制作にあたっては SP 各面のピッチを精密に測定して修正を行っている。測定は薬師寺理事が担当した。

#####

第 103 回レクチャー・コンサート (講師： 船木篤也氏)

(2025 年 7 月 12 日(土)開催)

フルトヴェングラー・センター 音響担当理事 中村匠一

2025 年 7 月 12 日、土曜日に行われたフルトヴェングラー・センターの第 103 回レクチャー・コンサートは、音楽評論家の船木篤也さんをお迎えし、「フルトヴェングラー指揮のブラームス第 1 交響曲をめぐって」という題で進行しました。

今回のレクチャーの大きな特徴として、特に第 4 楽章しか残されていない 1945 年のベルリン、アドミラル・パラストでのベルリン・フィル（BPO）とのライブ録音を中心として話が進められていったというところでしょう。船木さんはこの演奏について以下の 2 つの疑問点を提示されました。

【疑問点 1】

この 4 楽章は「驚きの名演奏」であるには違いない。だが、他のフルトヴェングラーのブラームス 1 番の演奏とそこまで隔絶した違いがある演奏なのか？

【疑問点 2】

そもそも、この録音は本当に 1945 年のアドミラル・パラストでの演奏を収録したものなのか？

以上 2 点の疑問を念頭において、以下の 3 つの比較をしながら、この第 4 楽章を検証していこうという流れで前半は進んで行きました。

(1)ブラームスの楽譜に書かれた指示とフルトヴェングラーの実際の演奏の比較

(2)この 1945 年の演奏とフルトヴェングラーの他の「ブラームス 1 番」の演奏の比較

(3)上記(1)と(2)の比較を踏まえて、では他の指揮者の演奏ではブラームスの指示にどう対応しているか？の比較

1945 年の第 4 楽章の演奏を解説するために、船木さんは「ブラームスの指示」と「フルトヴェングラーが演奏で実際にやっている事」の比較表を作られました。これがとても分かりやすいもので、これを目で見ながら演奏を聴いていくだけでも、フルトヴェングラーの、さらには他の指揮者の演奏がどれだけブラームスの指示に忠実で、なおかつどれだけ自らの解釈を加えているか、が一目瞭然になりました。

まず、2 部構成の曲の序奏部に注目していくと、弦の緊迫したピチカートの後、木管が出て来る前のところにフルトヴェングラーはハッキリとパウゼ（間）を入れています。そして序奏部 2 部に入るまで、ブラームスは「イン・テンポ」（テンポを守れ）と指示していますが、フルトヴェングラーはここですこしずつアツチェレランドをかけ、ティンパニが厳粛な響きでその流れに終止符を打ち、アルペンホルンのテーマが出てくるまではっきりとテンポを落とします。

船木さんが楽譜を示しながら解説して下さったのですが、序奏 1 部に見られる 4 度の下降音階はこの「交響曲第 1 番」の基本をなすもので、アルペンホルンのテーマの前兆でもある。そして、アルペンホルンのテーマはスイスに滞在していたブラームスとその雄大な景色とクララ・シューマンへの想いを歌詞付きで手紙に書いてクララに送ったメロディです。

となれば、この序奏第 1 部は、まさに芽吹いた自然がアルペンホルンのテーマで花開く、いわば「シューマン的な」有機的繋がりを感じさせるもので、フルトヴェングラーのテンポの変化は、まさにその秘められたストーリーをより明確にする点で非常に大きな効果を上げていると見る事が出来ます。

そして、ここが重要なところなのですが、上記の部分でのフルトヴェングラーの音楽作りはルツェルン（1947）でもウィーン・フィル（VPO）とのライブ（1952）でも大きな変化はありません。厳密に聴けば VPO との演奏ではややティンパニのアタックが大人しめで、パウゼも若干短いという差はあるにせよ、その辺りはフルトヴェングラーの解釈が変わったというより、オーケストラや会場の音響の違いにも考慮した結果と言えるような気がします。

ここからさらに提示部を比較表にそって見ていくことにしたいのですが、ブラームスは 94 小節目のオーケストラのトゥッティ、そして 118 小節目の第 2 主題が現れるところで「アニマート」（生気を吹き込むように）という指示を書いています。しかし、フルトヴェングラーは 62 小節目のあまりにも有名な第 1 主題を豊かに歌わせてから、テンポをどんどん加速させていって、トゥッティのところ「アニマート」、そこからはテンポの動きを抑えて、再び第 2 主題で「アニマート」そして展開部的再現部に至る前でリタルダンド＝テンポを落としていく、という非常に精妙にテンポの調整をしています。

展開部的再現部からコーダに至る演奏では、ブラームスの「マルカート」（くっきりハッキリ）という指示を守りながらも、300 小節目の第 2 主題の前にこれまた大きなパウゼ＝間を置き、そこから再度精妙な店舗調整を行って、コーダに入る前で再度出てくるブラームスの「マルカート」の指示をより重厚

に、効果的に聴かせる配慮をしています。コーダでは407小節目の全ての管が鳴る部分において、明確に序奏2部におけるコラール主題を意識した「アンダンテ」的なテンポで始まり、最後にリタルダンドをかけ、この長い楽章の旅路の終わりを壮大に締めくくります。

これらのブラームスの指示以外の細やかな調整を加えることで、より音楽に劇的な効果をもたらすことは序奏部と共通していますし、基本的な解釈はBPOとの演奏も、ルツェルンでの演奏も、そしてVPOとの演奏でも変えていません。強いて言うならVPOの演奏は若干テンポの動かし方が控えめでホルンの張り出しがまろやか、という違いを私的には感じましたが、それは前述の通りオーケストラとホールの違いによるところも大きい気がします。ルツェルンの演奏に関して言うならば、私がフルトヴェングラーの「ブラ1」に初めて接する者であれば、4楽章だけBPOとの演奏にコッソリ差し替えられても分からないんじゃないか？というくらい解釈も酷似しています。

ここで【疑問点1】に対する船木さんの見解が提示されました。つまりこの1945年、戦争末期での演奏と呼ばれる第4楽章の演奏は確かに音楽的に見ても、そして当時の録音技術からしても「特筆すべき」クオリティにあるものには違いない。しかし、他のフルトヴェングラーの同曲のライブでの解釈から「かけ離れた」ものでは決してない。という事です。

そして、ここからが重要なのですが、この演奏が戦争末期の緊迫した状況下で行われたという「物語」が音楽そのものを超えて独り歩きしてしまっていないかという事です。船木さんはBPOの記念SACDボックス・セットに入っている高名な音楽学者リチャード・タラスキンさんの同演奏へのレビューを引用されて「タラスキンほどの人でも、これだけ激情的な文章を書いてしまうのか」と驚かれたと話しておられました。そして、この演奏を語るにおいて、戦争末期の荒廃した中で行われた演奏だから感激的であるという見方を一旦脇に置いてみましょうという提案をされました。

理由は、先述のようにフルトヴェングラーの同楽章の解釈は他のライブでも共通するものがあること、そして何よりもそういう見方にとられる事が「名演奏を産むならば」的な、当時の悲惨な状況の肯定に繋がりがねない事を心配されたからだという事です。このあたりは近著「三月一日のシューベルト」で広島や震災の事にも触れられた船木さんの書き手としての「矜持」というべきものを感じた瞬間でありましたね。

次に、船木さんは【疑問点2】の検証にかかりました。すなわち「この録音は本当に1945年のアドミラル・パラストでの演奏を収録したものなのか？」という点です。


きっかけは船木さんがこの第4楽章のみ残されたブラームスの交響曲第1番の音響と、こちらは旧ベルリン・フィルハーモニーで行われた録音であることが明らかになっている「コリオラン」序曲（1943年6月27-30日録音）を聴き比べられた時の事です。私達も会場で同じ音源を比較試聴しましたが、特にティンパニのアタックと残響の残り方があの4楽章と酷似していて、会場が同じなのではないか？という疑念はおろか、マイクの設置場所まで一緒なのではないかと思わせるほどの迫真の音響がそこにはありました。

翻って、今度は正真正銘、アドミラル・パラストで録音されたヨッフムのベートーヴェン5番（1945年1月12日録音）とフルトヴェングラーのシューベルト「未完成」（1944年12月12日録音）を聴きました。奇しくも丁度1か月違いの録音です。私の感想ではありますが、「コリオラン」や「ブラームス1番4楽章」との違いは

- ・ティンパニのアタックの輪郭がぼやける。ロールの音も繋がって聴こえる。
- ・直接音（例えばティンパニの打音）と残響が綺麗に分かれない。全体的にもやっとしてしまう。
- ・管の張り出しが強い。マイクセッティングがより近めなのではないか。

というものでした。以上を踏まえて考えると、ブラームス1番4楽章の録音はどう聴いてもアドミラル・パラストでの録音より、旧フィルハーモニーでの録音に近いように感じる。船木さんが【疑問点2】のような思いを抱かれたことには大いに共感できる、という感想でした。

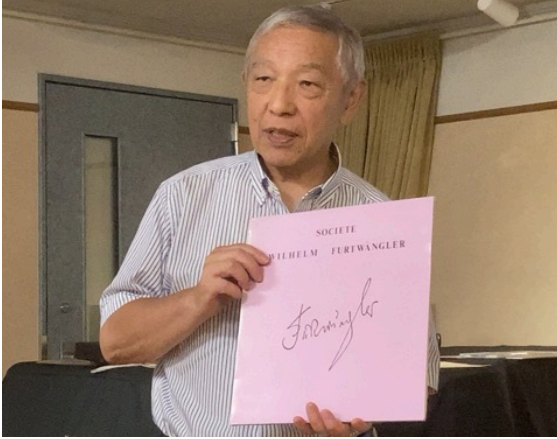
それに付け加えて、フルトヴェングラー・センターの第 66 回会報に掲載されたカール・エンゲル氏のマグネトフォン録音に関する 2 つの文章 = 『前奏曲と結尾』 『日付の問題』 がかなりその疑問を裏付ける資料として紹介されました。




Vortragsfolge

1. Begrüßung Direktor Dr.-Ing. Heyne AEG
2. „Les Préludes“ von Franz Liszt
(gespielt vom Orchester der Städtischen Oper, Charlottenburg)
Dirigent Staatskapellmeister Lütze
3. Technische Einführung Dr.-Ing. Schepelmann AEG
4. Aus „Dorfswalben aus Österreich“ von Joh. Strauß
Aus der Arie aus „Linda di Chamounix“ von
Donizetti (gesungen von Erna Sack)
5. Anekdote von Heinrich v. Kleist
(gesprochen von Heinrich George)
6. Über Anwendungsmöglichkeiten des Verfahrens im
Tonfilm Dr. Richard Schmidt
Hilfstechnische Zentralstelle
7. Aus dem „Forellenzintett“ von Franz Schubert
(gespielt vom Fehse-Quartett, Berlin, am Flügel F. Leitner)
8. „Mondscheinsonate“, letzter Satz, von L. v. Beethoven
(gespielt von Ferdinand Leitner)
9. Aus der 1. Sinfonie, 4. Satz, von Joh. Brahms
(gespielt vom Philharm. Orchester, Berlin)
Dirigent Wilhelm Furtwängler

Wiedergabe der Darbietungen mit dem neuen AEG-Magnetophon-Gerät





センター会長の中村さんによる詳訳全文は大変長くなりますので、最も重要な部分だけをとりあげると、1941 年 6 月 10 日にのベルリン UFA-Palast am Zoo (当時ベルリンのハイデルベルク通りにあった封切り映画館) での、いわば「マグネトフォンお披露目会」に、当時 FTZ (映画技術中央局) の所長を務めていたリヒャルト・シュミットが出した、いわば「お披露目用サンプル音源」の最後に、「フルトヴェングラーと BPO によるブラームス第 1 番交響曲の第 4 楽章」の音源があったことが、当時の資料で明記されていました。(写真の赤枠部です。写真はセンターの HP からお借りしました。)

その資料を読んで舩木さんは「我が意を得たり」と思われたそうです。確かに 1945 年、アドミラル・パラストでフルトヴェングラーはブラームスの交響曲第 1 番を振っているという演奏記録はある。が、今そう伝えられている録音は、この「マグネトフォンお披露目会」に出された音源 = すなわち 1941 年 6 月より前に旧フィルハーモニーで録音された音源ではないか? という推理が繋がるのです。

この推理は【疑問点 1】にも繋がってきそうな気がします。確かに戦時下で行われたコンサートの緊迫感はあるかもしれませんが。しかし、フルトヴェングラーのこの曲の 4 楽章の解釈 = 進め方は基本的部分は変わっていないことを併せて考えるならば、この「4 楽章のみ」残された演奏の凄みは、戦時の団員やオーディエンスの心理状態以上に、やはり「旧フィルハーモニーの響き」によるところが多いと私的には思うのです。そして、この響きが失われてしまったという事は、戦後のフルトヴェングラーにとっても、BPO の楽団にとっても、ベルリンの市民にとっても、そして今彼らの録音を聴く私達にとってもやはり悲劇的な出来事であったと思えるのです。

そして、ここから舩木さんのお話は比較(3) = すなわち他の指揮者はこの曲の 4 楽章でブラームスの指示にどう対応しているか? フルトヴェングラーの対応との違いと、それがブラームスの意図とどう結びついているか? についてのお話に移っていきます。例を挙げれば

①ヴァント

提示部のアツチェレランドなし。ブラームスが「アニマート」（生気を吹き込む）を指示したトゥツティの部分から急激に加速する。船木さんはこの演奏を録音が行われた正にその会場であるムジークハレ（現在のライスハレ）で聴かれていたので、この急加速に少なからぬ驚きと感銘を受けたという事です。

②アーベントロート

基本的に①のヴァントと似た解釈です。トゥツティでの急加速あり。ヴァントはアーベントロートとのかかわりも深く、特に彼の弟子のオイゲン・パープストとはケルンの指揮者の座を争った間柄でしたが（ザイフェルト著のヴァント伝による）、アーベントロートは当時ブラームスの解釈の権威の一人でもあったシュタインバッハの弟子であり、シュタインバッハは、BPOの初代常任指揮者でもあり、初期のワーグナーを支え、ブラームスの最大の理解者でもあった大指揮者、ハンス・フォン・ビューローの弟子であったことを考えると、この解釈は「ブラームス直伝」と言えるのかもしれませんが。

③メンゲルベルク

1943年の録音で、TAHRAにより発見されたACO（アムステルダム・コンセルトヘボウ）での演奏会の記録。メンゲルベルクと言えば、かなり曲を大胆に改変するという定評がクラシックファンの間でも根強いところですが、ここでも次のような一聴すると奇異にも思えるような解釈が聴かれます。

①1 楽章のコーダで2段階でテンポを落とす

②4 楽章のフレーズが、音を短く切っているの、ぶつ切りのように聴こえる

しかし、船木さんによると、これもシュタインバッハの口伝に近い事で、例えば①については「ピチカートが鳴るときはオリジナルのテンポに戻すべきであるので、その為に直前にテンポを落とせば、曲としての効果が得られる」。②については「ここは2小節のユニットで構成されているので、その切れ目が明確になるように最後の音を短くすると良い」という指示に基づいている事だそうです。つまりメンゲルベルクの手前勝手な解釈ではない、という事になります。

ここで出てきたシュタインバッハの口伝＝正確に言うと彼の弟子であるヴァルター・ブルーメがシュタインバッハの発言を書き残したもの（は、船木さんが写真で掲げられている"Performing Brahms - Early Evidence of Performance Style"という本に紹介されています。ケンブリッジ大から出版されたもので、ブラームスと同時代の演奏家たちが彼の音楽をどのように演奏したか、その最も重要な証拠を一冊にまとめ上げた大著です。ブラームスは自作曲のテンポ設定についてはあまり事細かに譜面に書かない作曲家であったと言われるので、このような資料は非常に貴重です。

では、フルトヴェングラーの演奏にはシュタインバッハの口伝がとりいれられているところがあるか？という、やはりあるのです。「アニマートになって2つ振り出来るように、その前からテンポを上げておくと効果的だ」とか「コラール主題が出て、フォルテシモが来るころは、少しテンポを落とすように」というシュタインバッハの指示は正にフルトヴェングラーの演奏に反映されているように思います。

このような経緯を経て、船木さんのリクエストで聴いた1951年のフルトヴェングラー&北ドイツ放送響のブラームス1番（フランス協会盤LP）は大きな感銘がありました。多くの先人から受け継いだものと、フルトヴェングラーの解釈が非常に高い次元で結びつき、イッセルシュテットによって鍛えられたオーケストラが彼の解釈に応え、ムジークハレの素晴らしい空間に響いた音楽を、この時代としてはベストの録音でとらえたこの一枚は、この日の「ブラームス1番を巡る旅」にふさわしいフィナーレであったと思います。

「山にも色々な登り方がある」と言われるように、この「交響曲第1番」に込められたブラームスの思い、特にクララに伝えたかった想いを表現することが演奏者にとって一つの到達点だとするならば、そこにたどり着く方法は、近年のピリオド・アプローチだけでなく、こういったヒストリカルな音源を深掘りしていくことによって、さらなる新しいルートが見えてくることもあるのかもしれませんが。配信などでそういった音源も幅広く聴ける時代になった今、これからこの曲を演奏する方が様々な演奏に接し

て、自身がブラームスの思いに到達できるルートを見つけて頂ければ、いちクラシックファンとしてこれ程嬉しい事はない。そんなことを考えながら、この日の船木さんのレクチャーを振り返っているところです。

講師の船木さんと、参加者の皆様に改めて心からの感謝を。

第 104 回レクチャー・コンサート (講師： 広瀬大介 博士)

(2025 年 9 月 15 日(土)開催)

フルトヴェングラー・センター 音響担当理事 中村匠一

9 月 15 日のフルトヴェングラー・センターのレクチャーコンサートは、講師に広瀬大介さんをお招きし、「フルトヴェングラーはベートーヴェンの交響曲第 1 番をどう扱ったか」と題して、1952 年 11 月のウィーンでのライブ録音を参考にお話して頂きました。

この広瀬さんのお話は、フルトヴェングラーによるベートーヴェンの一連の交響曲の録音を聴き返してみるとともに、シリーズとして「ベートーヴェンの各交響曲がどういう意義を持っているのか」を改めて考えてみましょう、という趣旨で企画されたものです。

まず着目点として、20 代のベートーヴェンの前半生をさらってみると、彼が生きたのは貴族社会から市民社会への変革期であり、ハイドンの弟子として師事しながらもその独立不羈的な姿勢はこの頃から生涯を終えるまで貫かれていました。

彼がボンからウィーンに活躍の場を移した 1790 年代はいわゆる音楽ファンが「ベートーヴェンの名曲」というような作風の作品よりは、ハイドンやモーツァルトの影響を感じさせる、古典派様式に基づきながらも革新的要素を持った作品を多く書いていましたが、今回とりあげた「交響曲第 1 番」はそのウィーン時代の集大成とも呼べるもので、それはベートーヴェン自身も強く自覚していたようです。

彼がこの作品にかける思いは 2 つのエピソードに現れています。まず、自身の作品である事を強調するべく作品番号を付けていたということ(交響曲第 1 番は Op.21)。そしてその初演時(1800 年 4 月 2 日、ウィーンのブルク劇場にて)のプログラムです。広瀬さんが調べられたところによると、その初演は以下のような演目であったようです。

- ①モーツァルトの交響曲(作品番号不明)
- ②ハイドンの「天地創造」からアリア
- ③ベートーヴェンのピアノ協奏曲第 1 番(Op.15)の改訂稿
- ④ベートーヴェンの 7 重奏曲(Op.20)
- ⑤再びハイドンの「天地創造」から二重唱
- ⑥ベートーヴェン自身によるピアノの即興演奏
- ⑦交響曲第 1 番(Op.21)

現代の標準的なコンサートからすると、ちょっと考えられないほど盛り沢山の内容で、4 時間ぐらいの演奏会になったようですが、ベートーヴェン自身がこの演奏会を主催する事、そして曲目からも自身がハイドンやモーツァルトの後継者をアピールするなど、若き日の彼の自信と野心が感じられます。

ここから、広瀬さんは譜面を元にこの曲の構成について語られました。この交響曲は「ハ長調」で書かれていて、全体として非常に明朗な印象を与えるのですが、実はかなり革新的な手法で書かれています。例えば第 1 楽章は序奏付きのソナタ形式で書かれていますが、その 12 小節の序奏はハ長調(交響曲第 6 番「田園」と同じ)で始められており、さらにそのハ長調が終わりそうで終わらない「偽終止」という手法が使われています。広瀬さんがピアノを弾きながら解説して下さったのですが「お辞儀で頭を上

げようとしてもなかなか上げられない」という感覚ですね。提示部で八長調の第 1 主題が出てくるまで、こういう不安定な調性を使っておきながら、楽章全体を聴くと実にスムーズに繋がっている。このあたりは「当時の現代音楽」として聴衆に強いインパクトを与えたであろうことが、広瀬さんの解説を聴くと実感できるのです。

その他にも第 3 楽章などでは、「メヌエット」と題されていますが、そのテンポ指定から実質はスケルツォであり、旧来の交響曲からの脱却を目指す彼の意志が感じられます。当時の感覚だと「メヌエット」は貴族の踊りであり、ベートーヴェンは続く第 2 番の交響曲ではこれを完全に抜いてしまうのですが、こんなところにも前述した貴族社会から市民社会への変革期という世相を音楽という形を持って表現しえたベートーヴェンの強固な意志と才能に驚かされるところです。そして、そのような革新的な要素を詰め込みながらもそれぞれの楽章の個性がバラバラにならずに、「交響曲第 1 番」という作品全体として有機的に繋がっているところも改めて驚嘆せざるを得ません。

さて、そういう視点を持って 1952 年のウィーン・フィルとのライブ録音を聴いてみると、フルトヴェングラーの演奏は上述の一つ一つの主題の描き分けを非常に丁寧にやっていることがわかります。第 1 楽章においても、第 1 主題から第 2 主題に移り、提示部が終結するときに、少しテンポにブレーキをかけている。現代の演奏ではインテンポでサラッと流してしまうケースも多い中「ここは大事なところ」という事を印象付ける演奏になっています。また、広瀬さんの解説で印象的だったのは「ピアニッシモ」(pp, 「非常に静かに」) を交響曲の中で使う事はこの第 1 番の交響曲が初演された時は珍しかったという事なのですが、それがフルトヴェングラーと VPO の演奏ではちゃんと表現されていた事に驚かれた、という事でした。「この時代は伝統としてちゃんと残っていたのかもしれないね」という広瀬さんの言葉に深く首肯したところでした。



第 2 楽章ではベートーヴェンの指示である「カンタービレ」=動きを持って歌うようにという指示をフルトヴェングラーがどう表現しているかが焦点で、ここで彼はベートーヴェンの「リズムの楔(くさび)」のようなものをうまく処理し、まさに「動きを持って歌

う」演奏を体現していました。私自身はフルトヴェングラーの演奏の大きな魅力として彼の「リズム感」があると思っていますが、それが見事に発揮されたところと言えるのかもしれない。続く第 3 楽章においても、トリオの部分の佇まいの良さ、「こうあって欲しい」という呼吸感が表現され、「音楽の歩み」を感じさせてくれます。

第 4 楽章のフィナーレも疾走感はあるけれど、先走らず、音楽の造形を崩さない。それぞれのテーマの絡み合いをわかりやすく表現し、彼がロマン派の作品を扱う時とはまた一味違った、細部までこの音楽を愛おむような姿勢が感じられるものでした。録音の数が多い事からも、広瀬さんはフルトヴェング

ラーがこの「交響曲第 1 番」という作品に愛着を持って接し、この作品の全体像や革新性を改めて丁寧に扱おうとしていた気遣いが感じられるという感想を持たれていたようです。

その後、1954 年のベルリン・フィルとのライブも聴いてみたのですが、オーケストラの反応の良さ、技量という意味では、長年彼が鍛え上げてきた BPO に一日の長があるようにも思えますが、お互いの気遣いがかえってフルトヴェングラーの意図を汲んでいるという点では VPO とのライブの方がかもしれない、というのが広瀬さんの感想でした。ただ、前述のようなフルトヴェングラーのこの曲の基本的な捉え方に大きな違いはなかったように思います。

ここからは私見になりますが、私はこのレクチャーコンサートの前に自分が持っている「交響曲第 1 番」の CD を見つけられる限り一通り聴いてみました。その時はフルトヴェングラーの演奏は HMV レコーディング、つまり VPO とのセッション録音だったわけですが、彼の録音にしては珍しく、セッション録音とライブ録音の差が少ないように感じました。勿論、音楽の高揚感、会場の空気感などには違いがありますが、音楽の構成の仕方はこの日に聴いた 2 つのライブ録音も含めて共通するものを感じます。聴き比べた中ではむしろフルターの演奏などの方が縦横無尽にテンポを動かしていて、このあたり、フルトヴェングラーとフルターという同時代を生きた指揮者のあいだでも、ベートーヴェンの初期の交響曲を古典派の音楽として扱うかロマン派の音楽として扱うかという見解が分かれていたのかもしれませんが、いずれの演奏もとても面白く、綿密に構成された曲だからこそ、それぞれの指揮者の解釈の違いを浮き彫りにする、なかなか奥の深い曲だな という感想を新たにしました。

この広瀬さんのベートーヴェン解説はシリーズになる予定なので、広瀬さんが参考文献の一つとして使われていた、大崎滋生さんによる「ベートーヴェン 完全詳細年譜」を買ってみました。楽理に詳しくない私にとっては手ごわい一冊になるかもしれませんが、この機会にベートーヴェンの音楽をもう一度学び直しても良いかもしれないと思ったというわけです。広瀬さんによる「交響曲第 2 番」のレクチャーまでに、ある程度の予習をしておきたいと思います。

最後に、恒例のご挨拶ではありますが、講師の広瀬さん、音源を提供して下さったフルトヴェングラー・センターの会長である中村さん、そしてセンター会員の皆様とレクチャーコンサート参加者の皆様に心からの感謝を申し上げて私の感想をしめたいと思います。ありがとうございました。

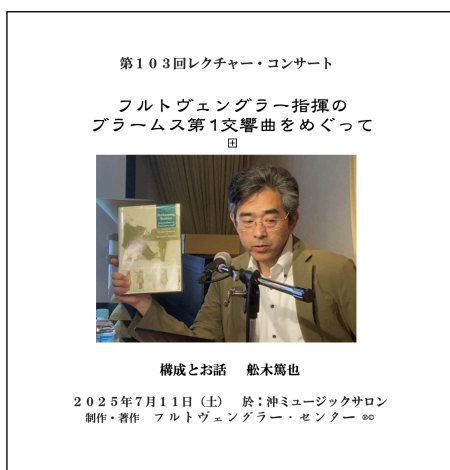


頒布資料

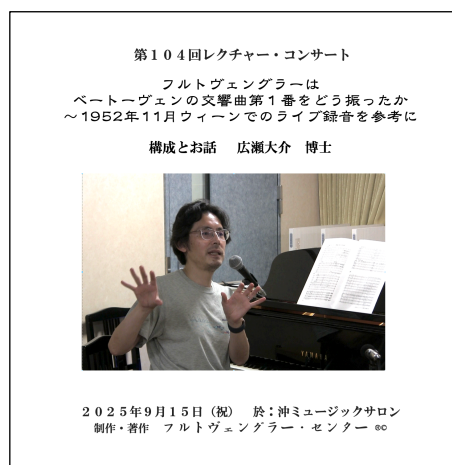
恒例により上記のレクチャー・コンサートをビデオ収録致しました。遠隔地やお仕事その他で参加いただけない方々のためにブルーレイ・ビデオディスクで頒布いたしますのでご利用ください。

また、引き続きメニュー画面を用意して扱いやすくするとともに、講師のお話は音響用マイクロフォンで録音し、観賞用再生音源とともに DSD レコーダーで別途収録し、聴きやすさと高音質を追求しています。鑑賞に使用した音源を、収録時間に応じて 96kHz/24 ビット PCM 無圧縮ハイレゾ音源又は 48kHz/24 ビット PCM 無圧縮ハイレゾ音源として収録しました。（なお製作はブルーレイに一本化しました。）

さらに当日配布、映写した資料、楽譜などを適宜画面にはめ込み編集して、資料としても大変充実した内容になっています。



WFER2503- BD ¥3,200



WFER-2504 ¥3,200

申込方法：

1. 同封の郵便振込票をご利用下さい。
2. 一応の申し込み期限は **2025年12月19日(金)** です。
3. 原則として締切り時のご注文数を元に製作いたします。それ以降もお申込は戴けますが、追加製作・頒布まで日時を要する場合がありますので、できるだけ期限までにお申し込みをお願い致します。
4. このディスクはセンター会員自身が所有される事を条件に 3 セットまでご購入いただけます。オークションを含む転売及び譲渡目的・名義貸しは一切お断り致します。
5. **発送： 2026年1月以降**

お問い合わせの際は ①振込年月日、 ②振込金額をお知らせ下さい

#####

センター既発盤についてのご感想

WFHC-068/72

Dietrich von Kaltenborn

Dear Masayuki,

finally I have had enough time to fully listen to the new set, this time a full four CDs plus programs from Berlin and even Cairo!

First of all, I like the idea of presenting all existing version of Bruckner 7 in one set which allows for very interesting comparisons. Also I was fond to find the Rome concert assembled in one edition, whereas I had it spread out on four different labels.

Starting with the 1941 broadcast, my comparison was Delta DCCA 13-14. The excerpts are identical, so the source was probably the same and it would be interesting to know how Delta got hold of it. The pitch

is significantly lower on the later which also explains the longer running time. WFHC is more vivid thanks to the higher pitch and also has less extraneous noise. Maybe Delta used some 1990s digital filtering? Overall WFHC gives the more pleasant listening experience. These excerpts are for me always fascinating and frustrating at the same time due to the gaps.

Going on to the 1942 studio recording of the Adagio I found only very small differences to the transfer in "The complete WF on record"(Warner 0190295232405)

Both versions have very good side joins, especially compared to the old Teldec CD. Maybe Warner has a bit more noise but I found it hard to distinguish.

The next recording is the version from October 1949. As Mr. Smidth writes in the booklet it comes from an LP. Compared to the EMI edition (EMI 724356620629) from 1996 its clearly the same source but despite a higher degree of hiss also has an additional warmth and body to it that seems to me lost on the EMI CD version. This performance was without audience and I personally would not place it as number 1.

The Cairo concert from a different source than usual is definitely fresher and much less noisy the on my DG 4762701. It seems the sand storm has gone away! Interestingly the original program and Tremines concert list are quite different. Quite frustrating again to see what might have been recorded: a Haydn Symphonie, Strauss Tod und Verklaerung, more Wagner etc.

The Rome concert was probably the biggest surprise for me in this set and especially so the Bruckner. Tahra FURT 1098 seemed the last word for a satisfactory transfer but this version now is way less noisy and has practically no distortion in the loud passages. Maybe the Fonit Cetra LP still used a better source or the acetates were in better condition?

In any case this transfer is far superior and I am very happy to have my personally favorite version in so much more beautiful sound. I believe the city of Rome on that night inspired conductor and orchestra to this incandescent performance.

For the rest of the concert each piece is again different. The Debussy on M&A 719 clearly comes from acetates, is heavily distorted and distant. The sound on WFHC to me sounds like a tape and almost a different concert.

The Strauss compared to Delta 0010 is again slightly higher pitched and has a lower noise level but to me it seems that both transfers come from the same source. This in my opinion clearly must have been an acetate disc.

The final piece, Wagner's Tannhaeuser, was issued on DG 4740302 and again the new WFHC has less noise and cracks and puts an exciting end to this amazing concert.

This has become a great set not only as a collection of all different versions but also for excellent transfers which in several cases are the best available!

Many thanks for this big achievement!

(日本語訳) 親愛なるマサユキ様,

ようやく十分な時間を取って、新しいセットをじっくり聴くことができました。今回は4枚組CDに加え、ベルリン及びなんと(!)カイロのプログラムまで添付されており、大変嬉しく思っています!

まず、ブルックナーの7番の既存の全録音を1つのセットに収録したアイデアが素晴らしいと思います。これにより、非常に興味深い比較が可能になります。また、ローマのコンサートの全体が1つのパッケージにまとめられていて嬉しかったです。以前は4つの異なるレーベルに分散していたため、統一された形で聴けるのはありがたいです。

1941年の放送録音から比較すると、私の参照はDelta DCCA 13-14です。抜粋は同一のソースからと思われるため、Deltaがどのように入手したのか興味深いです。そちらのピッチが明らかに低く、これが長い演奏時間の一因でしょう。WFHCはピッチを高く修正してあるので、より鮮明で、不要なノイズも少ないです。Deltaは1990年代のデジタルフィルターを使用したかもしれませんが、全体としてWFHCはより快適な聴き心地を提供します。これらの抜粋は、私にとって常に魅惑的な演奏ですが、空白部分のためイライラもさせられます。

1942年のスタジオ録音のアダージオについては、「The complete WF on record」(Warner 0190295232405)の復刻との違いはごくわずかでした。両バージョンとも面の接続は非常に良好で、特に古いTeldec CDと比べると顕著です。Warner版は少しノイズが多いかもしれませんが、区別するのは困難でした。

次の録音は1949年10月の演奏です。スミット氏がブックレットで指摘するように、これはLPからの復刻です。1996年のEMI版CD(EMI 724356620629)と比べると、明らかに同じソースですが、ヒスノイズがより多いにもかかわらず、センター版にはEMIのCDにはない温かさと厚みがあります。この演奏は観客がいないもので、個人的には第1位には置かないでしょう。

カイロのコンサートは、通常とは異なるソースからで、明らかにより新鮮で、私のDG 4762701よりもはるかにノイズが少なくなっています。砂嵐は収まったようです！興味深いのは、オリジナルのプログラムとトレミヌのコンサート・リストがかなり異なる点です。またしても、録音されたかもしれない作品(ハイドンの交響曲、シュトラウスの「死と浄化」、さらにヴァーグナーなど)が聴けないのは残念です。

ローマのコンサートは、このセットで私にとって最大の驚きでした。特にブルックナーが印象的です。ターラ FURT 1098は満足のいく復刻の最終版と思われていましたが、センター版のバージョンははるかにノイズが少なく、大音量部分でもほとんど歪みはありません。フォニット・チェトラのLPはより良いソースを使用していたか、アセテート原盤がより良い状態だったのかもしれません。

いずれにせよ、この復刻ははるかに優れており、私個人の最も好きなバージョンを、はるかに美しい音質で手に入れられたことに大変満足しています。その夜のローマの街が、指揮者とオーケストラにこの灼熱の演奏をインスパイアしたのでしょう。

コンサートの他の曲についても、それぞれが異なります。M&A 719のドビュッシーは明らかにアセテート盤から復刻されており、重度の音歪みと距離感があります。WFHCの音はテープのような質感で、ほぼ別のコンサートのように聞こえます。

シュトラウスはDelta 0010と比べてややピッチが高く、ノイズレベルが低いですが、両方の復刻は同じソースから来ているように思えます。これは明らかにアセテート盤だったに違いありません。

最後の曲、ヴァーグナーの『タンホイザー』は DG 4740302 でリリースされましたが、またもや WFHC の新盤はノイズとクリック音が少なく、この素晴らしいコンサートの興奮に満ちた結末を飾っています。

これは、異なるバージョンを網羅したコレクションとしてだけでなく、いくつかのケースでは最高品質の復刻を実現した点でも、素晴らしいセットとなっています！

この大いなる成果に感謝します！

ディートリヒ・フォン・カルテンボルン (バイエルン国立管弦楽団 チェロ奏者)
(日本語訳 フルトヴェングラー・センター 会長 中村政行)



WFHC-073/75 について

Furtwängler conducts Brahms's Symphony No. 1 in 1947

This triple cd set combines recordings from the Salzburg festival on August 13, 1947 and the complete recording of the Lucerne festival concert on August 27, 1947. As a filler we hear the famous recording of the 4th movement of the symphony with the Berlin Philharmonic Orchestra on December 16, 1940 – a test recording on tape made shortly after the discovery of pre-magnetization.

CD 1 begins with the soundtrack from a footage of the last bars from the rehearsal of Brahms's Violin concerto played by Yehudi Menuhin and the VPO under Furtwängler's baton on August 13, 1947 – do observe the silly speaker talking: the concert in D minor, also: this was the very first meeting between Menuhin and Furtwängler!

Then we hear Brahms's 1st symphony from the evening's concert in the Festspielhaus. Although the whole concert was broadcast by both RWR and RAVAG, this recording of the symphony is the only work that exists. The original tape stem from Furtwängler's son-in law, Alfred Kunz, married to Furtwängler's daughter, Friederike. I must say that the WF Centre has done a marvelous work with my tape to dig out the full potential of this dramatic reading.

CD 1 concludes with the above-mentioned 4th movement played by the BPO on December 16, 1940.

CD 2-3 contain the Lucerne festival concert of August 27, 1947: Beethoven's 1st piano concerto with Adrian Aeschbacher as soloist followed by Leonore overture No. 3. After the interval the concert concludes with the performance of Brahms's 1st symphony. The whole concert was broadcast by two Swiss radio stations: Monte Ceneri and Sottens, also, the Swedish radio broadcast the whole concert – and recorded all of it. These CDs are based on the Swedish recordings.

I like the Lucerne concert very much, but I find the Salzburg recording of the symphony more dramatic than the Lucerne one. The Lucerne performance of Beethoven's Piano concerto No. 1 is the only existing recording of that work conducted by Furtwängler, thus an important addition to his discography. It is played beautifully by Adrian Aeschbacher, who follows Furtwängler's tempo fluctuations. In 1943 he played Brahms's 2nd Piano concerto with Furtwängler, thus they knew each other. This performance of the concerto is more dramatic than normally experienced – typical Furtwängler style. The same can be said of Furtwängler's performance of the 3rd Leonore overture.

As to the Brahms symphony, we have three versions from 1947, the two in this set and the HMV studio recording with the VPO from November 1947. Comparing the two VPO recordings is quite easy: The overall sound quality of the studio recording is more harmonic, the live recording from Salzburg has more drama, more tempo fluctuations, but Furtwängler's conception of the work is the same. And this is valid for the Lucerne 1947 and Berlin 1940 performances, too. For a comparison between the three recordings of the 4th movement in this set, I refer to the excellent cover note by Atsuya Funaki.

Henning Smidth
October 21, 2025

(日本語訳)

フルトヴェングラー指揮 ブラームス交響曲第 1 番 1947 年

この 3 枚組 CD には、1947 年 8 月 13 日のザルツブルク音楽祭での録音と、同年 8 月 27 日のルツェルン音楽祭コンサートの全曲録音が収録されている。特典として、1940 年 12 月 16 日にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共演した交響曲第 4 楽章の有名な録音が聴ける——これはマグネトフォン予備着磁技術の発見直後にテープで行われたテスト録音である。

CD 1 は、1947 年 8 月 13 日にフルトヴェングラー指揮、イエフディ・メニューインとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によるブラームス「ヴァイオリン協奏曲」リハーサル最終楽章の映像から収録した音源で始まる。ここで愚かなアナウンスに注意されたい：「二短調協奏曲、そしてこれはメニューインとフルトヴェングラーの初めての共演であった！」

続いて、フェストシュピールハウスでの夕べのコンサートからブラームス第 1 交響曲が聴ける。コンサート全体は RWR と RAVAG の両局で放送されたが、交響曲のこの録音だけが現存する。オリジナルテープはフルトヴェングラーの娘フリーデリケと結婚した娘婿アルフレート・クンツから提供された。フルトヴェングラー・センターが私のテープからこの劇的な演奏の真価を掘り起こす見事な作業をしてくれたことは特筆すべきである。CD 1 は、前述の 1940 年 12 月 16 日の BPO による第 4 楽章演奏で締めくくられる。

CD 2-3 には 1947 年 8 月 27 日のルツェルン音楽祭コンサートを収録： ベートーヴェンのピアノ協奏曲第 1 番（ソリスト：アドリアン・エッシュバツハー）、続いてレオノーレ序曲第 3 番。休憩後、ブラームス第 1 交響曲の演奏でコンサートは締めくくられる。このコンサート全体は、スイス放送のモンテ・チェネリ局とソッテンス局によって放送されたほか、スウェーデン放送が全編を放送し録音した。これらの CD はスウェーデン放送での録音に基づいている。

ルツェルン公演は大変好ましいが、交響曲の演奏はザルツブルク録音の方がルツェルンよりも劇的だと感じる。ベートーヴェンの第 1 番ピアノ協奏曲は、フルトヴェングラー指揮による現存唯一の録音であり、彼のディスコグラフィーにとって重要な追加作品である。エッシュバツハーはフルトヴェングラーのテンポ変化に従い、見事に演奏している。1943 年に彼はフルト

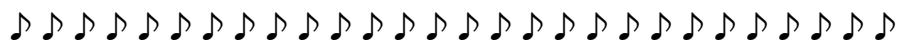
ヴェングラーとブラームスのピアノ協奏曲第 2 番を共演しており、両者は気心が知れていた。この協奏曲の演奏は通常体験されるものより劇的であり、典型的なフルトヴェングラー様式と言える。レオノーレ序曲第 3 番の演奏についても同様のことが言える。

ブラームスの交響曲第 1 番に関しては、1947 年に 3 つの録音が現存する。本セットに収録された 2 つと、1947 年 11 月のウィーン・フィルとの HMV スタジオ録音である。2 つのウィーン・フィル録音の比較は容易だ。スタジオ録音は全体的に調和がとれた音響品質を持ち、ザルツブルクでのライブ録音はよりドラマティックでテンポの揺らぎが豊かだが、フルトヴェングラーの作品の解釈は同じである。これは 1947 年ルツェルン公演と 1940 年ベルリン公演にも当てはまる。本盤に収録された第 4 楽章の 3 録音を比較するには、船木篤也氏による優れたライナーノーツを参照されたい。

ヘニング・スミット

2025 年 10 月 21 日

(日本語訳：フルトヴェングラー・センター会長 中村政行)



Marc Medwin (アメリカ合衆国在住会員) マーク・メドウィン

Marc Medwin has been teaching music history at American University in Washington D.C. since autumn 2008. He writes on classical and popular music for both academic and journalistic publications, and Furtwängler was a major catalyst for his entry into the world of classical music nearly 30-five years ago.

(マーク・メドウィンは 2008 年秋よりワシントン D.C. のアメリカン大学で音楽史を教えている。学術誌とジャーナリズム誌の両方でクラシック音楽とポピュラー音楽について執筆しており、フルトヴェングラーは 35 年余り前に彼がクラシック音楽の世界へ足を踏み入れる大きなきっかけとなった。)

WFHC073-75 contains the recording that made me eager to join the Wilhelm Furtwängler Centre of Japan. The final movement of Brahms' first symphony, stated in the liner notes to have been recorded in December 1940, encapsulates everything I hold dear about Furtwängler's conducting. The opening moments present it all in microcosm: the natural build toward the climax and the immensely satisfying timpani at 0:26 only set the stage for the luminous plateau of strings and winds, the whole then fading toward silence with inexorable grace. I will never forget my initial experience encountering that exuberance and control of gestural color; in that prolonged moment, the entire movement's peaks and valleys are prefigured. I might even say that the entire post-Enlightenment Romantic ethos resides in it. I think of the overture to Rameau's opera Zoroastre in its initial form, the microcosmic progression from darkness to light, every time I hear Furtwängler presenting one of Brahms' best movements. Now, we are fortunate to have Mr. Atsuya Funaki's superb analysis of what he rightly observes to be an extremely important historical document, and I haven't even mentioned the other concerts comprising the package! I'm now hearing these recordings in sound as natural as Furtwängler's conducting, and the sole representative of the now-lost 1940 concert has never sounded better. I was disappointed by the version in the Berlin Philharmonic's box set, so I am especially happy

to hear the performances, all of these performances, in such expertly rendered transfers with curation to match! Thank you so much, WFCJ!

(日本語訳)

WFHC073-75 には、私がフルトヴェングラー・センターへの入会を熱望するきっかけとなった録音が収められている。ライナーノーツによれば 1940 年 12 月に録音されたとされるブラームス第 1 交響曲の最終楽章は、フルトヴェングラーの指揮において私が最も愛する要素をすべて凝縮している。冒頭の瞬間がそれを縮図のように示している。クライマックスへ向けた自然な盛り上がり、そして 0:26 の圧倒的な満足感をもたらすティンパニは、弦楽と管楽が織りなす輝かしい頂点を予感させるに過ぎない。そして全体は、抗いがたい優雅さをもって静寂へと消えていく。あの奔放さと色彩表現の統制力との初邂逅は生涯忘れられない。その長く続く瞬間の中に、全楽章の起伏が予見されている。啓蒙主義以降のロマン主義精神の全てがそこに宿っていると言っても過言ではない。ブラームスの最高楽章の 1 つをフルトヴェングラーが提示するのを聴くたび、ラモーのオペラ『ゾロアスター』序曲の原初形態——闇から光への微宇宙的進行——を思い起こす。今や我々は、船木篤也氏が「極めて重要な歴史的資料」と正しく指摘したこの録音について、その卓越した分析を享受できる幸運に恵まれている。パッケージに含まれる他の演奏についてはまだ触れてもいないのだ！今やこれらの録音は、フルトヴェングラーの指揮そのもののように自然な音で聴ける。失われた 1940 年コンサートの唯一の記録は、かつてないほど鮮明に響いている。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のボックスセット収録版には失望していたので、これら全ての演奏が、これほど見事に再現された音源と、それにふさわしい選曲で聴けることに、特に喜びを感じている！WFCJ、本当にありがとう！

(日本語訳：フルトヴェングラー・センター会長 中村政行)

マーク・メドウィン

#####

フランス・フルトヴェングラー協会の新譜について



SWF D20

1954 年 5 月 4 日パリでのフルトヴェングラー

音源は SWFJ 42/3R

ヴェーバー「オイリアンテ」序曲

ブラームス「ハイドンの主題による変奏曲」

シューベルト「交響曲第 8 番『未完成』」

ベートーヴェン「交響曲第 5 番」

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

フランス協会制作の 24/192 及び 16/44 デジタル・ファイル (フランス協会会員限定頒布)

ファイル番号 : SWF D20 価格 : 18 ユーロ (支払いは銀行振込又は Paypal)

第 105 回 レクチャー・コンサート開催

開催日時：2025年12月14日（日）

開演 午後1時00分開演 終了 午後6時ころ

「ベートーヴェンの交響曲第2番とその時代的背景」

講師 広瀬大介博士

○参加費：

センター会員1000円、（非会員2500円）

○会 場：東京都文京区千石1-17-6

Tel 03-3943-5128

最寄駅：都営地下鉄三田線 千石下車、JR山手線 巣鴨下車

沖ミュージック・サロン

○お問い合わせ、予約：

電話またはEメールで下記まで。満席の場合はご入場いただけませんので、できるだけ予約ください。キャンセルは前日までにお願いいたします。

Tel：080-6603-3444

（電話でのお問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いいたします）

Eメール：info@furt-centre.com

終了後、引き続き講師を囲んでクリスマス懇親会を会場で開催いたしますので、是非お気軽に参加ください。参加費は2000円程度で、当日会場でもお申し込みをお受けいたします。フルトヴェングラー・ファン同士でドイツのクリスマスで食べられるシュトレン、レープクーヘン、グリュウヴァインに軽食とビール、ワインなどを食べ飲みながらの語らいはいかがでしょうか？

会員継続手続きのご案内

2025年12月31日を以てフルトヴェングラー・センターの2025年度会員期間が満了になりますが、会報の発行が遅れたので、勝手ながら現会員の有効期限を2026年3月末日まで自動延長させていただきました。継続手続きなどは次号会報でご案内いたします。

また何人かの会員の方で、メールアドレスを変更されたにも拘らず、センターへのお届けがなく、メールが返送されるケースがあります。ご入会当時とメールアドレスを変更された方はお忘れなくセンターにご連絡ください。

《お願い・お断り》

- ◎頒布資料の転売・譲渡等は禁止です！ 名義貸し・転売・譲渡・オークション出品は厳にお断りいたします。
- ◎銀行振込の控は、お支払いの証拠資料です。紛失せぬよう大切に保管下さい！
センターにお問い合わせをいただく時は、振込控に記載の「郵便局受付日付」と「金額」をお知らせ下さい。
- ◎海外協会のCD等につきましては、あくまで取り次ぎサービスのみをさせていただいております、フルトヴェングラー・センターとしては製品のソースそのもの、および妥当な外見性までの保証責任はもっていないことをあらかじめご了解いただきますようお願いいたします。また、視聴に支障がないようなケースその他の損傷、汚れなどによるお取替え、返品はご容赦下さい。
- ◎寄稿の内容はフルトヴェングラー・センターの主張・見解を代表するものではありません。
- ◎発行人の許可なく記事・写真等を無断転載・転用することは厳にお断りいたします。

ホームページに掲載した会報では、原稿がカラー写真の場合はモノクロではなくカラーでご覧いただけます。



1949年 ルツェルン音楽祭 二重協奏曲のリハーサル

フルトヴェングラー・センター会報第73号 発行日 2025年11月

編集・発行人 フルトヴェングラー・センター®

〒223-0052 横浜市港北区綱島東2-14-16

名誉会長：アンドレアス・フルトヴェングラー博士

名誉会員：ズービン・メータ、クリスティアン・ティールマン、パーヴォ・ヤルヴィ、ヘルゲ・グリューネヴァルト

アドバイザー：ヘニング・スミット（通称 オルセン）

理事・会長：中村政行 理事：市川悠一、大橋陽一郎、津野宏、薬師寺純平、呼川秀邦、中村匠一（音響担当） 監事：鹿内浩胤

チーフ・リサーチャー：清水宏 テクニカル・アドバイザー：清水公典

電話（お問い合わせなどは夜8時～10時の間にお願いします）080-6603-3444

ゆうちょ銀行振込口座 00240-9-111630

ゆうちょ銀行以外からの振込先：（口座名義）フルトヴェングラー・センター

【店名】〇二九（読み ゼロニキュウ）【店番】029 【預金種類】当座【口座番号】0111630

E-mail：info@furt-centre.com URL：http://www.furt-centre.com